

2015年12月の金融経済概況のポイント

■景気の基調判断

- 今月は、公表日程の関係で未入手の指標もありますが、景気判断については、ヒアリング等で得た情報等も加味した結果、「個人消費等の回復に遅れがみられるが、基調的には持ち直している」との判断を継続しました。個人消費が依然盛り上がりを欠き、公共投資も全体として少なくなってきましたが、雇用環境の改善傾向が続き、企業収益も短観結果をみる限り堅調なこと、観光も堅調を持続していることなどから、基調的には持ち直しの方向にあるとみています。

■今年1年間を振り返ると

- 日本銀行本店が「金融経済月報」で示すわが国全体の景気判断は、8月までは「緩やかな回復を続けている」としていましたが、9月以降は若干トーンダウンさせて「わが国の景気は、輸出・生産面に新興国経済の減速の影響がみられるものの、緩やかな回復を続けている」という表現にしています。

また、日本銀行札幌支店が毎月公表する「金融経済概況」では、5月分までは「北海道地域の景気は、一部に弱めの動きがあるものの、緩やかに回復している」としていましたが、7月1日公表分以降は、判断を引上げ、「北海道地域の景気は、緩やかに回復している」としています。

こうした中、道北地域の景気判断は、1年間を通して据え置き（同じ表現）でした。据え置きと言っても、「基調的には持ち直している」状況が続いているので、決して悪化したり停滞している訳ではありません。全国や全道の回復の動きに比べると、一歩か二歩遅れたところにいるものの、徐々に良い方向に向かっているとみています。

- 道北地域の景気は、この1年間を通してみると、①柱となる個人消費が

今ひとつ伸び悩んだこと、②公共工事が予算の圧縮から減少したこと、③観光は外国人客の増加により好調だったこと、④雇用情勢は各企業が人手不足で悩まされるほどタイトだったこと、といった特徴が挙げられると思います。さらに、日銀短観の結果などを踏まえると、⑤企業の収益は底固く、景況感もそこそこよかったこと、⑥雇用がタイトな割には、賃金が広範に上がる動きはみられなかったこと、⑦設備投資も少なかったこと、も挙げられると思います。

- また、全国や全道の景況との差は、道北地域の場合、①海外景気や円安等により影響を受ける輸出産業が少ないこと、②中小企業のウエイトが圧倒的に大きいこと、③富裕層や外国人観光客による高額品の消費の動きがあまりみられなかったこと、などによるものと考えられます。
- このように、この1年間の道北地域の経済は、弾みをつけて回復することができた訳ではなかった一方、決して後退した訳でもなく、地道に持ち直し、(よく言えば)堅実に推移した1年ではなかったかと思います。
- 年明け後の展望ですが、ポイントとなるのはやはり個人消費の動向ではないかと思われます。そのためには、(企業にとってはなかなか厳しいのかもしれませんが)賃金の上昇を通じた所得の増加が欠かせないと思います。さらにそのためには、各種政策効果の浸透、わが国全体により着実な景気回復、当地企業による地道な収益の積み上げと、これらを通じて当地の各経済主体が将来の道北経済について明るい見通しを持てるようになることが不可欠だと思います。

以 上